20211231　　猪高の森自然観察会　2021 年 12 月報告書

猪高の森自然観察だより　12 月号

開催日時:2021年 12 月 17 日(金)　9:30～12:00
天候:晴
テーマ:今月の観察会はお休みでしたので、テーマはありません。
参加人数・構成:　一般 6 名 (うち NACS-J 指導員 2 名)
コース:森の集会所 → 畑を通過 → 井堀の大クス → 井堀下池 → 棚田 → 復路 → 森の集会所

気温の変化の激しい期間が何度かあったものの、全体的には暖かかったらしく、野草の中にはいまだに花を付けている種もあり、野鳥の好きな方に尋ねると、カモなど冬鳥たちの飛来が 2 カ月ほど遅く、北の地方から寒さを避けて南に移動してくる鳥たちも遅れているとの事です。

(画像は別の日に撮ったものを含んでいます)

●集会所の壁を見ると・・

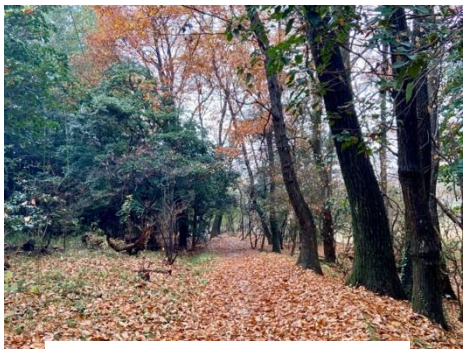
窓枠の隅の小さな窪みに、**ナミテントウ**たちが集まって冬越しをしていました。

ナミテントウの鞘羽の模様には変異が大変多く、他の種類と似ている場合もあるので、注意がいります。

テントウムシの仲間は名古屋では今までに 51 種類の確認記録があります。好んで食べる物も色々ですが、ナミテントウはアブラムシを食べます。

今年は９月に、名古屋市及びその周辺地域で、一斉調査がありました。

●散策路の甘い香りは何？



黄色く色づいた散策路

重なったタカノツメの落ち葉

タカノツメの三出葉
特徴ある葉なのですぐわかります。

散策路を歩いていると、なんだか甘い香りがします。これは、**タカノツメ**と呼ぶ樹の落ち葉からの香りです。発酵が関係しているのか、雨が降った翌日とか、落ち葉が湿った状態の時に特に強く香るようです。観察時には五感を使うことが、楽しさを倍増させるポイ

ントになります。三枚の葉が合わさった「三出葉」と呼ばれる特徴のある葉ですので、歩かれた時に探してみると良いでしょう。

タカノツメの名は冬芽（左の画像）の形が「鷹の爪」に似ているからつけられたとの事です。別名の「イモノキ」は木の材質が白く柔らかいため、芋のように加工しやすいからとか。下駄や経木、マッチ棒や箸などに使われるとの事です。

春の若葉は香りが良いので、山菜として食用にします。

●フユシャクって何のこと？

冬の天気の良い日に、「蛾かな？」と思われるような虫が飛んでいるときがあります。勿論、前月号で紹介した成虫で冬越しをするチョウの仲間とは別種で、晩秋から早春に羽化（さなぎから成虫になること）するガの仲間がいます。その仲間を「フユシャク」と呼んでいます。（シャクとはシャクガ科に属する仲間だからです）

フユシャクは、幼虫は樹木の新芽が出る春に孵化（ふか）し、葉を食べて初夏に蛹化（ようか）します。メスのはねは完全に退化して飛べませんし、オス、メスとも口器が不完全なので何かを食べることも出来ません。羽化してからは、子孫を残すことだけに全力を使います。

チャバネフユエダシャク

クロスジフユエダシャク

クロオビフユナミシャク

ちょっと変わった生活サイクルを持つガの仲間たちです。

●モズのはやにえを見つけました

ここ棚田では、毎年モズが来ます。そうすると・・（苦手な人は見ないでください。）

カエル（左）とミミズ（右）がはやにえになっていました。

なぜ、モズは「はやにえ」を作るのか、に付いての最新の研究では、

「はやにえは、オスのモズがメスを獲得するための歌声の質を高めるための栄養食として機能している」

との事です。繁殖期の２月には、栄養食

として消費された後になり、ほとんどはやにえは確認できなくなるとのことなので、今度、確かめたいと思います。諸説あった「はやにえの意味」について、ようやく落ち着いたようです。

●食痕から虫を探そう！

クスノキ科の葉にこんな痕がついていました。（左）
葉の裏側とか、細かく探してみると、いました、いました、

クスベニヒラタカスミカメ（右）
という名のカメムシの仲間です。
　明るい所が苦手らしく、すぐ葉の裏側に隠れようとします。この時、天候は曇り、比較的長い時間、写真撮影に協力してくれました。
　ヘンな形や模様、食われた痕のような葉っぱを細かく探すと思わぬ発見があるかもしれません。この樹からは他にも、

孵化痕と思われるもの（左の赤矢印）や何だか分からないもの（右の青矢印）が見つかりました。
　樹１本からこれだけことが観察できます。じっくりと観ることがどれだけ大切かが解ります。

●他にもこんな色々な生き物たちが観ることが出来ました

　ヨモギの葉に見つけた、**ヨモギハシロケタマフシ**です。
　虫こぶ（虫えい又はゴール）の一つ。
　虫こぶの原因は、虫だけでなく、ダニ、線虫さらに菌類や細菌によっても形成されることが判ってきました。そのため、虫えい、ダニえい、菌えい・・、それらをまとめてゴール（Gall）と呼ぶことが多くなってきています。
　因みに、これは、タマバエの仲間によります。
ヨモギは、この他にも色々なゴールができますので、中々の注目植物です。
　今までの観察だよりでも、たびたびゴールの仲間は登場しています。6 月号では「クヌギハマルタマフシ」「ノイバラマルタマフシ」など様々な植物に見られ、一冊のハンドブックが出せるくらいです。気にして探してみると、結構みつかりますので、観察会でのお勧めポイントです。

オオカマキリ（左）と**チョウセンカマキリ**（右）の卵鞘（らんしょう）。
成虫になると、ひと目では分かりにくくなりますが、卵鞘ではその形の違いがはっきりとします。前月号の外来種：ムネアカハラビロカマキリの卵鞘とも比べて見てください。

ヨコヅナサシガメの越冬風景。左は成虫、右は幼虫。なぜ、一緒に越冬しないのか、同じ大きさの個体同士集まっています。共食いをしてしまうためなのか、フェロモンがあるのか？
原産が中国、インドなどの外来種です。

狂い咲きの花もありました。左は**モチツツジ**、右は**サワフタギ**です。
狂い咲きし易い個体が決まっているようです。気候の変化にも左右されるようで、今年はサクラにも見られました

ヒガンバナの葉
９月に鮮やかな花をさかせたこの花も今は葉だけの姿です。

コバノカモメヅルの実
もうすぐ弾けると、フワフワの冠毛を持った種が飛び出します。

テイカカズラの種
散策路に落ちていました。冠毛をつかって風に飛ばされてきたのでしょう。

これは地衣類の**ウメノキゴケの仲間**。

地衣類はコケ植物に似ていますが、藻類と菌類が共生した全く別の体の構造を持っています。

この仲間は生育範囲がとても広く、都市の中でも見つかります。

ネジキの冬芽（左）と実（右）。ネジキの冬の赤い芽は「三大美芽」の一つと言われる事もあります。残りの二つは「ザイフリボク」と「コクサギ」です。

陽だまりにあった花たち。左は**オオジシバリ**、中は**ハコベ**の仲間、右は**コセンダングサ**。秋の花が咲き残っていたりしているのは、暖かかったため？

秋の虫たちも残っていました。左は**アキアカネ**、中は**コバネイナゴ**、右は**フタナミトビヒメシャク**。

ミソハギの紅葉

ミゾソバの紅葉

ワレモコウの花

ヒヨドリジョウゴの実

ヤマハゼの実

ウメモドキの実

ナンキンハゼの実

アオツヅラフジの実

ツルマメの莢

カワラタケ

ヒイロタケ

キクラゲの仲間

ソテツの蕾

１２月の猪高の森は、秋と冬が混在している様子でした。これから、本格的な冬のよそおいに変わっていくのでしょう。

ソテツが蕾を付け、**ビワ**が花を咲かせ始めています。

冬には冬の自然があり、

生き物たちは春に向けての準備に大忙しです。

次回の自然観察会は

2022 年 1 月 23 日（日）

テーマは「冬芽と葉痕・野鳥の暮らし」　です。

一緒に歩きませんか？